

子供の教育に対する母親の関与について

—— 保 育 園 の 場 合 ——

西 垣 悦 代

目 次

- 1. 背景および目的
- 2. 方 法
- 3. 結 果
 - (1) 分析の基礎となる資料
 - (2) 質問項目の分析
- 4. 考 察
- アペンディクス

1. 背景および目的

幼児期の子供の発達におよぼす母親の影響の大きさは、今更言うまでもないことである。しかし、幼児に対する母親のしつけの方法や発達期待に関する研究は、ともすれば生活習慣や社会性の発達のみをとりあげることが多かった。しかしながら知的発達の面においても、母親の態度や教育観は子供に重大な影響力を持っていることは明らかである。(ここでいう「知的」発達の「知」は、狭義の知能や学力のことではなく、物事を関係づけたり、分析、推理、洞察したりする能力全般を指す。) 子供の知的発達と母親の諸要因との関連を調べた東ら(1980)の研究によれば、母親の子供の教育に対する意見・態度、発達期待、しつけの方略、コミュニケーションスタイルなどと、子供の知的発達との間には高い相関が見出されている(重相関係数.80)。

母親が家庭内において望ましい教育的環境を整えることと、子供の通う幼稚園や保育園と積極的に関わりを持とうとする姿勢とは、共に母親の教育的関心の高さを示す指標となり、特に幼児期の子供に対しては、さまざまな影響を与えていると考えられる。

前回の調査(西垣、1987)においてはこれらの2つの側面について、幼稚園と保育園の比較を中心に行った。その結果、幼稚園の母親の方が家庭内での教育的な働きかけに関して、より熱心であることが明らかになった。保育園の結果からは園差や地域差の要因がかなりあることが示唆されたため、今調査では対象を保育園の母親のみに絞り、データ数を増やしてより細かい分析を試みることにした。

2. 方 法

- (1) 調査対象： 金沢市の中心部および郊外の保育園、計8園の年長組の幼児の母親

有効データ数182

(2) 調査時期： 1986年11月

(3) 調査方法：(A)家庭内での子供に対する教育的働きかけ、および(B)家庭外での子供の教育に対する関与—主に園との関わり、に関してそれぞれ10項目から構成される質問紙を、保育園の担任保育士から子供に渡してもらい、約3週間後に回収した。回収率は63.6%～95.8% (平均78.2%)。

3. 結 果

(1) 分析の基礎となる資料

① 父母の平均年齢： 父親36.0歳 母親33.1歳

② 子供の数： 平均2.3人

③ 対象児の出生順位： 第1子86人 (47.3%)

第2子72人 (39.6%)

第3子24人 (13.2%)

④ 父母の教育レベル： 両親とも短大卒以上(H) 46人 (25.3%)

少なくとも一方が高校卒以下(L) 136人 (74.7%)

⑤ 父親の職業： 表1に示す通りである。

⑥ 母親の就労率： 平均49.5% (H)58.7% (L)46.3%

⑦ 三世代同居率： 平均42.9%

以上、分析の基礎となる資料に関しては、前回の調査と比べて三世代同居率が高くなっているほかは (前回は29.5%)、ほぼ同じであった。

表1 父親の職業とその割合

単位=人, () 内%

	会社員	公務員	自営業	医 師	教 師	その他
H群(n = 46)	13(28.3)	11(23.9)	10(21.7)	5 (10.9)	7 (15.2)	0 (0)
L群(n = 136)	56(41.2)	35(25.7)	35(25.7)	1 (0.7)	2 (1.5)	7 (5.1)
全体(n = 182)	69(37.9)	46(25.3)	45(24.7)	6 (3.3)	9 (4.9)	7 (3.8)

(2) 質問項目の分析

質問項目を(A)と(B)に分けて回答を得点化し、平均値を算出した。(A)の平均値は21.2、(B)の平均値は24.5で、前回の調査の結果とほぼ同じであった。

① 母親の就労の有無による差

母親の就労の有無によって、データを2群に分けて得点を算出すると表2のようになった。検定の結果、(B)に関して統計的に有意な差が認められた($t = 3.15$ 180df $p < .005$)。

子供の教育に対する母親の関与について

表2 母親の就労の有無による平均得点

	Aの平均 (SD)	Bの平均 (SD)
働く母親 (n=90)	21.3 (3.95)	* [23.8 (3.13) 25.2 (2.83)
専業主婦 (n=92)	21.2 (3.65)	

*p<.005

(B)の各項目に対する回答の「はい」と「いいえ」の割合を示したのが表3である。最も顕著な差が見られたのが、「父母会への出席」であり、次いで「行事への参加」「担任とのコミュニケーション」であった。また、「お母さんどうしの親しさ」と「園への協力」についても「はい」の割合に約10%の差があった。仕事を持っていることからくる時間的な制約によって、母親と園との関わりが薄くなっていることが伺える。両群にほとんど差が見られなかったのは、「園だよりには必ず目を通して」と「園での友達の名前を3人以上知っている」で、いずれも「はい」が100%近くを占めた。

(A)については、母親の就労の有無による差はほとんど認められなかった。

表3 母親の就労状況別にみた(B)の「はい」と「いいえ」の割合 単位二人, () 内%

B	項目	1 (友だち)	2 (話)	3 (父母会)	4 (園だより)	5 (行事)	6 (担任)	7 (理念)	8 (入園卒園)	9 (お母さん)	10 (協力)
働く母親 (n=90)	はい	83 (92.2)	62 (68.8)	32 (35.5)	89 (98.9)	40 (44.4)	28 (31.1)	24 (26.7)	19 (21.1)	53 (58.9)	46 (51.1)
	いいえ	2 (2.2)	5 (5.5)	22 (24.4)	1 (1.1)	8 (8.8)	23 (25.6)	11 (12.2)	37 (41.1)	16 (17.8)	6 (6.7)
専業主婦 (n=92)	はい	89 (96.7)	70 (76.1)	57 (62.0)	90 (97.8)	53 (57.6)	42 (45.7)	33 (35.9)	24 (26.1)	63 (68.5)	57 (62.0)
	いいえ	1 (1.1)	5 (5.4)	14 (15.2)	0 (0)	12 (13.0)	11 (12.0)	8 (8.7)	39 (42.4)	5 (5.4)	4 (4.3)

② 園差について

今回の調査では地域の異なる8つの保育園を対象とした。そこで園別に平均得点を算出したところ表4のようになった。

表より、(B)に関してはほとんど差が認められなかった。(A)ではR=18.6~23.7となり、かなりの差があることがわかった。(A)の項目は家庭内に関するものであるから、園差の原

表4 各園の平均点

	A園	B園	C園	D園	E園	F園	G園	H園	全体
(A)	18.6	19.7	20.1	22.1	20.0	23.1	22.1	21.2	21.2
(B)	24.8	25.1	24.3	24.9	24.2	24.9	23.7	24.4	24.5

西 垣 悦 代

因となっているのは地域における家庭層の問題であると考えられる。

最も得点の高いF園は、公務員官舎に住む家庭が多いため、同居率は26%と低い。また、父親の職業は、医師、大学教官が多く、H群が38%と8園中最も高い割合を占めている。次に得点の高いD園も同様で、公務員家庭が多く、同居率が低い。G園は文教地区に位置しており、近くに病院や学校がある。会社員と自営業の家庭が多く、H群が35%と多い。また、母親の就労率が最も高く（74%）、保母や看護婦などの専門職に就いている者が多い。一方、平均得点の低いA園とB園はともに郊外に位置し、H群の占める割合は10%未満である。そして、同居率は97%と78%ときわめて高い。

次にA園とB園の(A)の各項目に対する「はい」と「いいえ」の割合を表5に示した。比較のために、前回調査の保育園の平均値を併せて示してある。

表より、「習い事」と「文化的催し」への参加が極端に少ないことがわかる。また、「本を読み聞かせる」「将来の進路への希望」「道徳・社会のルール」も「はい」がかなり少ない。一方「文字の読み書き」と「数の数え方」の2項目は前回の平均値よりもかなり高くなっている。この2園の結果からは、全体に子供への期待度と言語的、文化的な刺激の乏しさが感じられる。地理的な要因も不利であろうし、三世帯同居の家庭が多いことから、母親の思い通りの子育てがしにくいとも考えられる。また、親の教育のレベルの影響もあると思われる。

表5 A園B園と前回調査の(A)における「はい」と「いいえ」の割合 %

	(A)	1 (しつけ)	2 (本)	3 (文字)	4 (宗教)	5 (進路)	6 (道徳)	7 (文化)	8 (数)	9 (習い事)	10 (T V)
A 園 B 園 n=33	はい	87.9	33.3	45.5	18.2	21.2	75.8	9.1	63.6	6.1	9.1
	いいえ	3.0	48.5	30.3	54.5	54.5	9.1	54.5	24.2	93.9	78.8
前 回 n=44	はい	88.6	59.1	31.8	25.0	36.4	88.6	27.3	38.6	56.8	9.1
	いいえ	2.3	9.1	38.6	38.6	25.0	2.3	36.4	31.8	38.6	59.1

園によって(A)の家庭内での親の教育的な働きかけに大きな差のする要因として考えられることは、これらに限定されるわけではないが、親の教育レベル、職業、同居の有無、地域の文化レベルなどが、直接あるいは間接に関連していると推測出来る。

③ 親の教育レベル

親の教育レベルによる差を調べるに当たって、園差や地域差の要因を排除するため1園のみで調べることにした。H群とL群の占める比率が最も接近しているF園における両群の平均得点を示したのが表6である。

子供の教育に対する母親の関与について

表6 F園におけるH群とL群の平均値

() 内 SD

	(A) の平均 (SD)	(B) の平均 (SD)
H群 (n=16)	* [24.4 (2.47) 22.3 (3.30)	* [26.1 (2.03) 24.1 (3.31)
L群 (n=26)		

*p<.05

(A)(B)いずれにおいてもH群がL群を上まわっており、その差は統計的に有意と認められた (A : t=2.14 40df p<.05 B : t=2.13 40df p<.05)。

項目別にみた「はい」と「いいえ」の割合は表7-a, bに示される通りである。

表より、(B)ではほとんどの項目においてH群の方が「はい」の割合が高くなっている。特に「父母会への出席」「園の理念・方針への理解」「園への協力」について大きな差が認められ、H群の母親の、園との関わりの積極性が明らかになった。H群の方がL群よりも母親の就労率が高いことも考えあわせると (H=43.8% L=38.5%)、この傾向は顕著なものといえよう。

(A)に関しては、「将来の進路への希望」「見るように勧めている TV 番組がある」「習い

表7-a F園における教育レベル別にみた「はい」と「いいえ」の割合 (A) 単位=人, () 内%

A		1 (しつけ)	2 (本)	3 (文字)	4 (宗教)	5 (進路)	6 (道徳)	7 (文化)	8 (数)	9 (習い事)	10 (TV)
H 群 n=16	はい	16 (100)	10 (62.5)	6 (37.5)	2 (12.5)	9 (56.3)	15 (93.8)	10 (62.5)	8 (50.0)	14 (87.5)	6 (37.5)
	いいえ	0 (0)	1 (6.3)	4 (25.0)	9 (56.3)	2 (12.5)	0 (0)	1 (6.3)	1 (6.3)	2 (12.5)	5 (31.3)
L 群 n=26	はい	23 (88.5)	15 (57.7)	11 (42.3)	3 (11.5)	10 (38.5)	22 (84.6)	14 (53.8)	15 (57.7)	19 (73.1)	5 (19.2)
	いいえ	0 (0)	3 (11.5)	11 (42.3)	17 (65.4)	9 (34.6)	1 (3.8)	9 (34.6)	4 (15.4)	7 (3.8)	15 (57.7)

表7-b F園における教育レベル別にみた「はい」と「いいえ」の割合 (B) 単位=人, () 内%

B		1 (友だち)	2 (話)	3 (父母会)	4 (園だより)	5 (行事)	6 (担任)	7 (理念)	8 (入園卒園)	9 (お母さん)	10 (協力)
H群 n=16	はい	16 (100)	12 (75.0)	7 (43.8)	16 (100)	6 (37.5)	9 (56.3)	10 (62.5)	4 (25.0)	14 (87.5)	14 (87.5)
	いいえ	0 (0)	0 (0)	3 (18.8)	0 (0)	2 (12.5)	1 (6.3)	1 (6.3)	5 (31.3)	0 (0)	0 (0)
L 群 n=26	はい	25 (96.2)	20 (76.9)	7 (26.9)	25 (96.2)	8 (30.8)	13 (50.0)	8 (30.8)	6 (23.1)	19 (73.1)	14 (53.8)
	いいえ	0 (0)	0 (0)	10 (38.5)	0 (0)	6 (23.1)	6 (23.1)	1 (3.8)	10 (38.5)	4 (15.4)	1 (3.8)

西 垣 悦 代

事をさせている」「道徳や社会のルール」において顕著な差が見られた。しかし「文字の読み書き」と「数の数え方」では、わずかながらL群の「はい」の割合がH群よりも多かった。

以上の結果より、親の教育レベルが高い方が、家庭においても、園との関わりにおいても積極的な傾向にあるといえよう。

4. 考 察

以上の結果より、母親の家庭内での子供に対する教育的配慮と、園との関わりは、いずれも平均値においては前回の調査の結果をほぼ支持するものであった。しかし就労別に見た場合は、働く母親の園との関わりが有意に低く、前回調査の幼稚園の母親の傾向に近いものとなった。母親の園との関わりの程度に園差は認められず、一方、家庭内での教育的配慮に園ごとの差が大きく現れた。教育レベルの高い家庭が多く、市の中心部に近い文教地区や住宅街にある園は、教育的・文化的刺激を豊かに与える家庭が多く、郊外にある三世帯同居率が高く教育レベルの低い層が多い園では、子供に与える刺激が少ない傾向にある。教育レベルによる比較では明確な違いが現れ、教育レベルの高い母親は、家庭での配慮と園との関わりのいずれにも熱心であることが明らかになった。熱心な母親は園に対して協力的であるだけでなく、園の方針や理念を理解しようと努め、積極的に情報を得ようとする。また、家庭においても子供に知的・文化的刺激を与え、子供の将来についての展望を持っている。これに対して、文字や数などを教え込もうとするのは、むしろ教育レベルの低い母親に見られる傾向である。これは東ら(1981)の研究において、就学前に文字や数を教えることが重要であると考える母親の意見と、子供の知的発達とはマイナスの関係にあると報告されていることとも一致し、興味深い。これは、幼児期の子供の知的発達を促す家庭内教育とは、文字や数字を教えるといった直接的な行動よりも、より総合的な刺激や、母親の子供に対する態度の影響が大きいことを示唆しているといえよう。

最後に、これらの結果より園側からのアプローチとして考えられることは、地域の実情に合わせたきめ細かいサービスである。育児情報の提供、子供劇や映画の上映、子供文庫の開設、講演会の企画など、子供だけでなく、母親に対しても積極的な働きかけをして、地域の中における保育園のあるべき姿を摸索してゆく必要があろう。

附 記

本論文は、1988年5月21日に日本保育学会第41回大会において口答発表した研究「子供の教育に対する母親の関与について(2)」を骨子とし、加筆したものである。

引 用 文 献

- 東 洋、他 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
西垣悦代 1987 教育への両親参加と両親教育の必要性 北陸学院短期大学紀要19 29-52

